

院のかてき様と稱する木像をその名稱より研究せるものである。著者の精密なる考證癖は趣味豊かな筆致と相俟つて讀者にあること、ろよさを傳へる裝禎亦之に合つてゐる。(四六判二一〇頁、價二・二〇、京都更生閣發行)〔肥後〕

●明季之歐化美術及羅馬字注音

北京輔仁大學景印本

明末の名墨工程大約字は幼博は、その別字の程君房を以て世に知らるゝ人であるが、その著の程氏墨苑は四庫全書編纂の時、既にその一部分を缺きしものか、彼の集なる幼博集を程大約撰とし程氏墨苑を程君房撰として、兩人の著の如く四庫全書總目提要に掲げられた程である。此の通行本の程氏墨苑卷三には利瑪竇贈文の一篇は見ゆるが、卷六下三十五葉以後にありし西洋宗教畫四幅をその圖説三篇は、之を全部闕けるもの、或はその中の圖説の右傍の羅馬字注音を闕けるものもありて、之は恐らくは清朝に天主教を禁止せる時削除せられたものであら

う。然るに近頃珍らしくも通縣の王氏鳴晦廬の藏本の中にその全部を存せるものが發見せられ、稀覯の史料として民國十六年九月即ち昨年九月到北京輔仁大學にて景印せられた。此處に紹介する本書は則ちそれである。申す迄もなく程氏墨苑は天地人物儒釋道の六集に分たれたものであるが、通行本には釋道を緇黃としてあり、而して天主教はも緇黃部の後に編入してあつたらしい。その天主教の部に此の西洋宗教畫四幅を利瑪竇撰の(甲)信而步海疑而即沈篇、(乙)二徒聞實即捨空虛篇、(丙)姪色穢氣自速天火篇の三文が編入せられてあつた筈であるが、削除せられて復た見る能はず、偶々王氏鳴晦廬本がその完璧を今日に傳へ得た譯である。三篇の文は三幅の宗教畫の解文である。その最も學者の興味を惹く點は景印する所の(丁)述文贈幼博程子篇と共に合計四篇の文の各々が何れも漢文の右傍に羅馬字を以て漢字の支那音を注せることで、その中には竇と蜜を混同視して共にHの音とせる様な誤も見受けられるが、(乙)(丙)(丁)の三篇には何れも萬曆三十三年歲次乙巳臘月朔撰文の年紀あれ

ばその同時に製せられたことを知り得る。宗教畫四幅には何れもその傍に拉丁文の説明ありその(一)は海岸にて人の溺れむとする所へキリストの現れたる圖にして、これ馬太傳第十四章第三十節なるキリストミペテロとの問答なることもその拉丁文の説明文にて明である。(二)はキリストが現れて二人の懷疑者を信仰に引き戻せる圖、(三)はソドマイト人がロトの家の二女を強奪せむとする所へ二人の天使が現れて神罰を課し暴徒を盲目とする圖にてこれゲネシス第十九章に見ゆるもの、傍の拉丁説明文にも暴徒が毆られて放逐せらるゝなりと説明してある。(四)はマリアの像にして上部に天主の二字の羅馬字注音を書し、下部に非常の信仰を以て此のマリアの圖を畫く云云の拉丁文が記されてある。而してモニョーラ・ド・シ・アンチニヤとあるは恐くはその畫工の姓名ならむかみ考へられる。前述の(甲)(乙)(丙)の文章はそれ／＼此の(一)(二)(三)の三圖に相應する漢文の法語にして、而も漢字の音も示さむが爲に傍に羅馬字を附記したものである。四文共に支那風に撰者の題名の後に卵形ミ方形ミの

二印を捺す、何れもJHSの陰文で、利碼寶が支那風俗に順應して布教することに努めた用意の程が充分に察せられる。尙ほ本書の終には羅馬字注音のみにて漢文を闕ける一文を附載してあるが、之は萬曆三十六七年頃印行せられた汪廷訥の坐隱訂譜所載のもので、汪氏の自跋に萬曆三十三年利碼寶より贈り來りしものとあるが、その詞句の意は少しも通じない。之は實は(丁)利碼寶贈程大約文及び(甲)信而歩海疑而郎沈の篇の羅馬字注音をばその意味を考へずして無暴に割裂轉載したもので、詞句の意の通じないのも當然と謂はねばならぬ。陳垣氏の跋文には審かにその錯誤の經緯を考證してある。兎に角本書の景印は已に佚せしものと想はれて稀觀の史料を學界に提供したもので陳垣氏の勞を多しせなければならぬ。

〔那波〕

● 日本考古學 後藤 守一 著

輒近日本考古學研究の進歩著しいものがあり、殊に朝鮮方面に於ける斯界の開拓は多大の刺戟を與へて大正初